
2023 年度事業報告

2024 年 6 月 5 日 (水)

公益財団法人 野間教育研究所

目 次

〔公1〕 教育研究事業

(1) 調査研究活動

- イ. 日本教育史研究部門 2
「高度経済成長期教育史」研究部会
- ロ. 社会教育研究部門 3
「教育と公共」研究部会
- ハ. 教育心理研究部門 4
「人生のやる気デザイン」研究部会
- ニ. 幼児教育研究部門 5
「幼稚園におけるリスク・マネジメント」研究部会
実験学校・野間自由幼稚園

(2) 講座・セミナー・育成活動 7

(3) 教育現場での相談・助言 7

(4) 広報活動 7

(5) 図書館運営 7

[公1] 教育研究事業

(1) 調査研究活動

イ. 日本教育史研究部門

「高度経済成長期教育史」研究部会

研究者	米田 俊彦（お茶の水女子大学教授）
	大島 宏（東海大学教授）
	須田 将司（学習院大学教授）
	鳥居 和代（金沢大学教授）
	西山 伸（京都大学教授）

「1950年代教育史」研究部会から引き続き同じメンバーで米田研究員をリーダーとして、2021年3月末日に発足した。2023年度中には10回の研究会を開催し、毎会2人の研究員から報告を受けて議論を重ねてきた。各研究員は、以下の記載のとおり、テーマや対象を絞りつつある。

- ①大島宏：「公立高等学校の設置、適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」（1961年）に関する史資料の収集・整理を行った。また、同法の制定過程をあとづけ、法案作成に至る状況や法案の変化を検討するとともに、都道府県による公立高等学校の設置を原則とするものの論点を整理した。
- ②須田将司：原発推進側のPR事業と教育との接点に着目し、科学技術庁原子力局『原子力委員会月報』や原子力産業会議『原子力産業新聞』から、「原子力教育の強化」や「原子力文化の形成」を掲げる記事を読み取った。また、1960年代にはじまる日教組や日本科学者会議の反原発運動に着目し、関連資料の収集・分析を進めた。
- ③鳥居和代：ことばなおし運動と地域の変容との関係について補足的な調査を行った。また、鎌倉市立腰越小学校所蔵のネサヨ運動関係資料の調査・収集を行い、資料目録の作成、映画フィルムの修復およびデジタル化、そして草創期の一次資料やチェーン校および家庭との情報発信に関する資料分析を進めた。
- ④西山伸：第一に、政治史の視点から大学紛争を分析することを試み、『佐藤榮作日記』『楠田實日記』『オンライン版楠田實資料』などの読み込みを行った。第二に、これらを含めた一次資料を使って東京大学における紛争の経緯を調査し、「東大パンフ」およ

び東大入試の中止過程について検討した。

- ⑤米田俊彦：高度経済成長期の教育政策の主導権をめぐり、自民党・文部省（政府・与党）に対する日教組の影響力が低下していく経過を、日教組自体の弱体化、各地の第二組合の発足、ILO87号条約問題や教員の超過勤務問題への日教組の対応などの動向を、『時事通信 内外教育版』から読み取る作業を行った。

ロ．社会教育研究部門

「教育と公共」研究部会

研究者 上野 正道（上智大学教授）
浅井 幸子（東京大学教授）
狩野 浩二（十文字学園女子大学教授）
田嶋 一（國學院大學名誉教授）
仲田 康一（法政大学准教授）
藤井 佳世（横浜国立大学教授）

本研究部会は、「教育と公共」のテーマについて研究を進めている。2023 年度もこれまでの年度と同様に、毎回 2 名ずつ 11 回の研究報告を実施し、それをもとに質疑とディスカッションを行った。各研究員の調査・研究テーマは以下の通りであった。

- ①浅井幸子：2023 年度は、ユネスコの 2015 年と 2021 年の報告書を出発点として、public good（公共財）と common good（共通財）の概念を検討した。提供が共同的である必要があり、国や自治体が提供に責任を負うものが公共財である。教育を公共財と捉える議論が、民営化・市場化と私事化によって崩れているのに対して、教育の利益がそもそも共同的であることを示す概念が common good としての教育である。レッキョ・エミリアの幼児教育を、public good であり common good であるものとして検討することが、本研究の中核である。
- ②上野正道：研究テーマは「民主的シティズンシップと公共性の教育思想の展開——デューイと進歩主義からビースタへ」で、デューイと進歩主義における民主的シティズンシップと公共性の教育論を、現代の教育哲学者であるガート・ビースタがどのように発展させ更新しようとしたのかについて考察した。ビースタが教育の機能を「資格化」「社会化」「主体化」に分類したことをもとに、デューイの教育論を民主主義の社会的概念に還元されるものではなく、そこに政治的な次元が含まれることを明らかにした。

- ③狩野浩二：研究テーマ「斎藤喜博の学校づくり」。2人の教師の教育実践記録を分析し学士課程における教師教育の可能性を検討した。島小の学校公開研究会第8回において取り組まれた武田常夫の授業を検討し、島小の到達点を確認した。斎藤の初の教育実践記録『教室愛』を元にその後の島小を起点とする学校づくり運動の成果を確認した。
- ④田嶋一：開国期から大正デモクラシー期にかけて出現した教育をめぐる公共的発想の系譜を明らかにする作業を進める一方、戦後教育における公共的発想の展開過程を解明する作業に取り組んだ。後者については、大田堯の「総がかりの教育」「新しい公共」論の深まりを内在的に明らかにする作業を進め、成果を得た。
- ⑤仲田康一：昨年度に引き続き、マイケル・フィールディングらによる「コモン・スクール」構想を分析することで、英国（イングランド）における公教育の論点について考察を深めた。人類にとって可能かつ望ましい教育を実現する学校の姿としての「コモン・スクール」の具体像を整理するとともに、フィールディングの教育者としての来歴とのつながりを明らかにし、また、コモン・スクールに向けた諸主体の責任や条件についても、考察対象を広げた。
- ⑥藤井佳世：人新世の時代における豊かな人間形成と教育の公共をテーマに、次のことを報告した。まず、ハーバーマスの市民的公共圏の議論に基づきながら公衆の誕生を踏まえ、今日的な市民同士の関係について考察を深めた。次に、これまで報告した内容をまとめ、人間形成における市民的公共圏の問題として、メディア社会と公私の重なりとその実践があることを確認し、人間の成熟と公共圏の議論を子ども・若者の生を包括する公共圏へ拡大する方向を示した。さらに、公共圏を構成する人々は互いに見知らぬ人々であるが、その見知らぬ人々が出会いコミュニケーションを交わす関係を友情として理解することによって、“暗い公共圏”から脱することができる可能性について検討した。

ハ. 教育心理研究部門

「人生のやる気デザイン」研究部会

研究者	渡辺 弥生（法政大学教授）
	榎本 淳子（東洋大学教授）
	倉住 友恵（駒沢女子大学准教授）
	杉本 希映（目白大学教授）
	中井 大介（埼玉大学准教授）
	中谷 素之（名古屋大学教授）

本研究部会は、生まれてから死を迎えるまでの生涯発達をターゲットに、人生をよりよく生きるための駆動力として必要な「やる気」に焦点を当て、2023年度は11回の研究会を開催、これまでの発表をベースにさらに具体的、実践的に各自の研究テーマを掘り下げて、論文・紀要にまとめることを視野に活動した。

- ①榎本淳子：先天性心疾患患者への面接調査をまとめるにあたり、発達の軌跡に関する論文のレビューを行った。それらのレビューを通して過去の語りを再構築するという視点からナラティブ・アイデンティティの考え方を整理し、さらに生涯発達の視点から喪失と獲得を中心とした選択的最適化理論にあてはめてアイデンティティの役割について検討した。
- ②倉住友恵：昨年度に続き、時間的展望研究のレビューを行った。特に、動機づけ概念との関連や時間的展望がキャリア形成とどのように関わるのかについてレビューした。また、時間的展望と動機づけとの関連に関する調査研究および時間的展望の1つである未来展望を促進する介入研究を計画し実施した。
- ③杉本希映：昨年度に引き続き、Gritについての研究を進めた。国内外の研究をレビューするとともに、Gritと好奇心、パッション、困難な目標への対処方略との関係の調査を行い、その結果を分析し、まとめた。その結果の一部を、日本心理学会第87回大会で、ポスター発表した。
- ④中井大介：昨年度に引き続き、恋愛関係・夫婦関係、その他の分野における自己拡張理論の最新のレビュー論文を中心に報告し、それを踏まえた具体的研究計画を発表した。また、「中井大介 (2023). 恋愛へのパッションと恋愛関係の形成・維持への動機づけの関連—パッションの二元論モデルの観点から パーソナリティ研究, 32(3), 119-121.」を発表した。
- ⑤中谷素之：「やる気のデザイン」について、引き続き学校教育の側面からアプローチした。「対話的な学びと動機づけ」「自己調整学習研究」「発達の多様性と児童・生徒の動機づけ」といった、今日の子どもの学びに関わる複数の教育心理学的視点から、近年の研究動向をレビューしつつ自身の研究データの報告を行い、有意義な研究交流、議論の機会を得た。
- ⑥渡辺弥生：「人生のやる気をデザインする」という大きな目標を念頭に、やる気について様々な切り口から考察を試みた。「物語る」ことを通してやる気が喚起されるか、AIが教育にどのような影響を与えるか、社会情緒能力や興味関心という非認知能力との関連性など、レビューを行った。また、やる気を高めるツールや教材についてソーシャル・エモーショナル・ラーニングの考え方をもとに紹介した。

ニ. 幼児教育研究部門

「幼稚園におけるリスク・マネジメント研究部会」

研究者 秋田 喜代美（学習院大学教授）
大澤 洋美（東京成徳短期大学教授）
久留島 太郎（植草学園短期大学教授）
境 愛一郎（共立女子大学准教授）
箕輪 潤子（武蔵野大学教授）
宮田 まり子（白梅学園大学准教授）

2020年4月より「幼稚園におけるリスク・マネジメント」を研究主題とし、特に園庭遊具の中でもリスクという点で注目されることの多いすべり台という遊具に焦点をあてて、園の保育者の専門性と実践知を検討した。2023年度には、前年度に実施したすべり台の写真を用いたリスクに関する保育者と養成校の学生に対する認識と判断の調査の分析、リスクに関する各園のガイドラインの分析を発展させた公園の安全ガイドライン資料の入手と分析、すべり台の歴史と多様なすべり台の安全等に関するリーフレットの作成を行い、そのリーフレットにもとづくシンポジウムや学会発表を行った。またすべり台製作メーカー3社へのインタビューの実施とプロトコルデータにもとづく研究の分析も進めた。

【学会発表】

一般財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
第14回幼児教育実践学会 2023年8月18日 研究者発表

「遊びとリスク ―安全の確保と挑戦の保障―」

子どもにとっての魅力的な環境と安全の確保や挑戦の保障について、アンケートやガイドライン・マニュアルを基に考察した結果の発表を行なった。また、遊具での遊びのリスクを低減させ、子どもが様々な遊びにチャレンジするための指導・物的管理・情報共有の視点についても提案した。リーフレットの配布及び会場での意見交換を実施。当日の発表は、久留島と大澤が担当した。

【論文に関する受賞】

「乳幼児教育学研究」第31号掲載の「遊びの中のリスクに対する認知と考え方の関連性―KYT 図版への指摘数の比較から―」の共著論文が第21回日本乳幼児教育学会学術賞を受賞した。

実験学校・野間自由幼稚園

幼児教育研究部会の研究テーマである「園におけるリスク・マネジメント」の調査の

ため、アンケート調査、聞き取り調査に協力した。

(2) 講座・セミナー・育成活動

- ・第3回幼児教育研究部会セミナー（2023年3月25日開催）の成果として、2023年10月12日、内容報告『すべり台から見る〈遊びとリスク〉』を発行。
- ・2024年3月15日、『大学沿革史編纂の手引き』（寺崎昌男著）を発行。

(3) 教育現場での相談・助言

コロナ禍での保育の在り方、行事の仕方等相談を受け、必要に応じてアドバイスした。

(4) 広報活動

- ・情報発信のために、研究活動の内容をホームページ上で公開してきた。
- ・当研究所の活動を広く世間に知らしめるため、開設以来10数年ぶりにホームページ・リニューアルに着手した（2024年4月1日より公開済み）。

(5) 図書館運営

1. 蔵書

- ・2024年3月末の蔵書数は、書籍では和書26,319冊、学校沿革史誌類を合わせて、計35,299冊となった。雑誌は、継続購読誌13種、他に明治期～昭和期に刊行された約300種以上の教育関係雑誌を保存している。
- ・本研究所の図書館は、日本教育史・社会教育・教育心理などを中心に、日本の教育に関する資料の収集を続けている。なかでも長年にわたり体系的に収集してきた日本の各学校の沿革史誌類は、2024年3月末現在8,980冊を所蔵しており、国内有数のものである。なお、2023年度は、沿革史誌類の収集は88冊だった。

- ・蔵書については教育関係図書から順番に脱酸性化処理を進めており、2023年度は1,012冊の脱酸性化処理を行った。
- ・稼働から10年経つ電動書庫のメンテナンスを行い、安全性に問題ないことを確認した。

2. 利用状況

- ・2023年度の利用者は、延べ164名。
- ・まとまったコレクションである、学校沿革史誌や地方教育史の資料調査のため複数回来館する閲覧者が多い。

3. 所蔵資料データベース

- ・所蔵図書データベースと所蔵雑誌目録は全蔵書が検索できるよう随時更新。
- ・『野間教育研究所所蔵学校沿革史誌目録』のうち、冊子体の残部がなく頒布できなくなっていた「国公立高等教育機関編（2002年3月現在）」については、2024年3月末までに受け入れた資料のデータを追加しサイトに公開した。

【2023年度 事業報告附属明細書】

2023年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する「事業報告の内容を補足する重要な事項」がないため、作成しない。